

# 属性別に見る同調効果

## The Impact of Conformity: Difference from Various Attributes

吉田遥香<sup>1</sup> 山口ひな<sup>1</sup> 福岡奨鯉<sup>1</sup>

Haruka Yoshida<sup>1</sup>, Hina Yamaguchi<sup>1</sup>, and Shori Fukuoka<sup>1</sup>

<sup>1</sup>近畿大学経済学部 経済心理学コース

<sup>1</sup>Kindai University, Faculty of Economics, Economic Psychology Course

**Abstract:** The aim of this study is revealing the difference in the impact of conformity. In our experiment, some confederates looked up the building. The impact of conformity was measured by the number of people who looked it up. We focused three attributes; age, level of school, and the degree of congestion. The results implied that the influence of conformity were different by attributes.

### 1. 研究の目的

一般的にはほかの国と比べて、日本人は争いを好まない民族性があり、まわりの人と同じ考えや行動を選ぶ傾向にあるといわれている。(goo.blog 2018 年) この傾向の裏側には、孤独を避けたいという心理が隠されている可能性がある。義務教育である小学校、中学校などで集団行動をする場合にまわりと違った行動を取ると、なかなか馴染めないという空気(同調圧力)が日本は強く、その中でこの慣習のようなものが構成されるのではないだろうか。このような風潮に関係する研究の中に、視覚を使った実験(Asch 1951)がある。はじめに被験者に図1のような図をみせる。そして、左側の線と同じ長さのものはA,B,Cの線のうちどれか、という質問をする。当然だれもが一瞥しただけでCだとわかるはずだが、同じ被験者として6人のサクラを参加させ、被験者が答える前にそのサクラ全員にAと答えさせた場合、迷わずCを選ぶのかということ調べる実験である。また、これと似たような別の種類の実験を数回繰り返す。結果として被験者たちは、始めのうちは申し訳なさそうにも正解を答え続けたが、18種類のこのような実験を繰り返し行った場合、正解を答え続けられたのは50人中わずか13人であったという結果が出ている。このように、人は多数の一致した意見の前では、同調の圧力から自分の意志と反する行動をとってしまうことがあるということが分かっている。たとえば遊園地で携帯のカメラを向けている人を見てその方向に何かあるのか、と確認してしまったことはないだろうか。これも一種の同調行動である。

本稿では、先述したような同調圧力のなかで生活を過去に送ってきた大人と、同調圧力のなかで現在

生活を送っている子どもとで、同調行動にどのような違いが表れるのかを調べる。アッシュの実験によって人には周りに合わせて行動を取る部分があるということが証明されているが、それは成長してきた環境やそれまでの経験によってその同調という行動が生まれているのか、それともこれまで人間が進化してきた上での本能的なものからその行動が生まれているのか、ということ調べるために小学生と大学生の同調行動の違いを研究する。また学力でも違いが現れるのかを調べるために大学別、まわりに人がどの程度いるのかで違いが現れるのかを調べるために混雑度別でも研究を行う。学力に着目した理由は、学生生活のなかで周りに流されることなく、意思をもって行動したことが反映される指標として適切だと考えたためである。周りと話さず寡黙に授業を受けている人が成績の良いイメージはないだろうか。また混雑度に着目した理由は、同調圧力が人の数に比例して強くなっていくのではないかという仮説について調査をしたいと考えたためである。人通りの多い街中などでは周りの人々を気にしながら行動する人は多いのでないだろうか。

本研究によって、自分がどのような状況下にあるときに同調行動を取りやすいのかということが理解できると考えられる。その時、自らの意思に反し、まわりに合わせるような行動を取って後悔をすることにならないかどうか、また自分の意思と違っても同調行動を取ることによって、その場では円滑に事を運べるのではないかということ冷静に判断することへの材料になるのではないかと考える。さらに本研究で得られる結果によって、人の同調の心理を悪用する商法などの防止にもつなげられるのではないだろうか。

実験の仮説は、大学生よりも、同調圧力にまさにさらされている小学生のほうが強い同調行動がみられるのではないかと予想する。学力別では、学力の高い人のほうが自分の意思を持った行動を選ぶのではないかと考え、比較的に同調行動の割合が低くなるのではないかと予想する。また混雑度については、同調をした人がさらに同調を生むというような連鎖が起こるのではないかと考え、高い場合（まわりに人が多くいる場合）のほうが低い場合と比べて、同調行動の割合が高いのではないかと予想する。

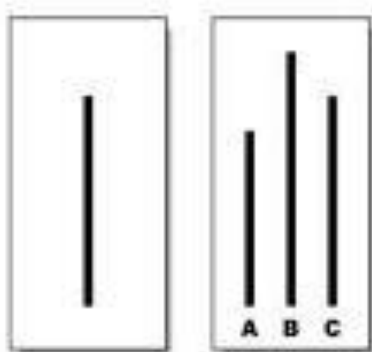


図1 アッシュの視覚実験で使われた図

## 2. 研究の方法

大学3校と小学校1校で実験を行った。期間は2018年11月28日から12月13日に行った。

大学内や小学校の通学路等で、何も無い空に携帯電話のカメラを向け、通行人の同調に関する行動を研究する実験を行った。手順は、はじめにサクラとして1人が何も無い空に携帯電話のカメラを向け、2分間でその前を通った総人数と、カメラを向けている方向に視線を向けた(同調した)人数をカウントし、同調した人の割合を算出する。そしてサクラを3人、5人と増やしていき、それぞれの条件で同じように実験を行う。

子どもと大人の間調行動比較のため、神戸市立本山第二小学校の通学路と、近畿大学東大阪キャンパス内にて上記の実験を行った。また学力別の同調行動研究のために、神戸大学六甲台第2キャンパス(偏差値62.28)と大阪商業大学メインキャンパス(偏差値47.5)へ行き、実験を行った。本稿では両大学の偏差値を比較し、前者を「学力が高い大学」、後者を「学力が低い大学」とする。最後に混雑度別の同調行動研究のため、近畿大学東大阪キャンパスにて閑散時の実験を行い、同大学で混雑時の実験を行った。本稿では、授業終了直後で人通りの多い時間帯を混雑

時とし、授業時間で人通りの少ない時間帯を閑散時とした。

## 3. 結果

サクラの前を通った歩行者の総人数と、同調の行動がみられた人数をカウントし、同調の割合を算出した。以下は属性別にみたその割合を示すグラフである。

図2は、小学生(子ども)と大学生(大人)の間調割合を比較した図である。括弧の中の数字はサクラの人数である。サクラが1人の場合と3人の場合には大きな差はみられないが、5人に増えると子どものほうが大きく割合が伸びるという結果になった。

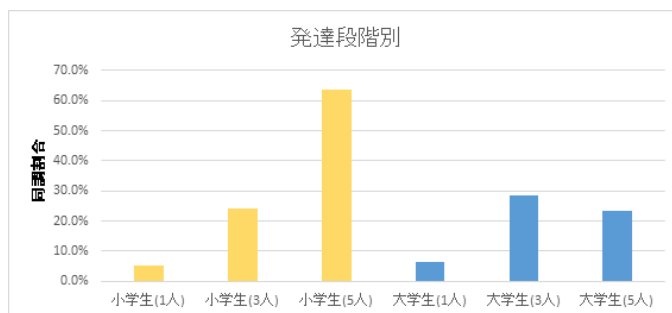


図2 発達段階別同調割合のグラフ

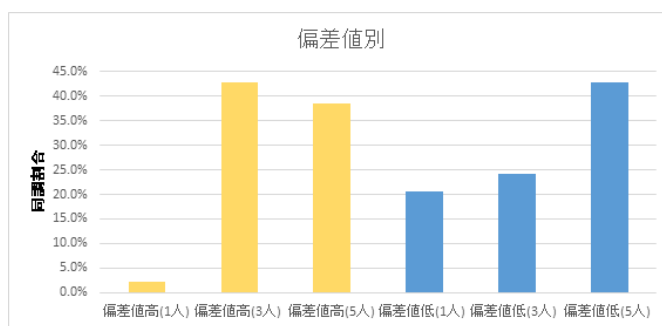


図3 偏差値別同調割合のグラフ

図3は学力の高い大学と低い大学の同調割合を比較した図である。サクラが1人の場合には学力の低い大学のほうが割合は高く、3人の場合には学力の高い大学のほうが割合は高く、5人の場合には両大学大きな差が出ないという結果になった。

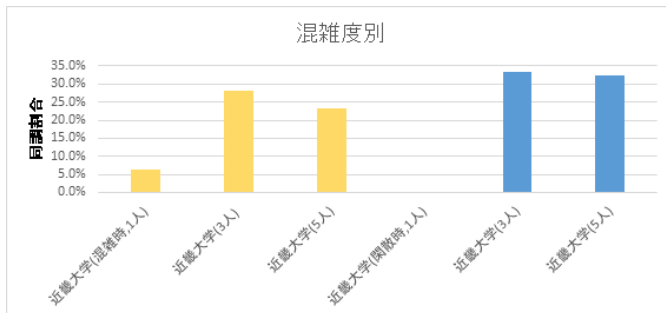


図4 混雑度別同調割合のグラフ

図4は、周囲に人が多くいて混雑している時と、周囲に人が少ない場合の同調割合を比較した図である。まずサクラが1人から3人に増えると割合は大きく伸びるが、3人から5人に増えた場合には大きな差がみられないことがわかる。さらに、混雑時と閑散時ではやや閑散時のほうが同調の割合は高いという結果になった。

#### 4. 考察

本研究は人がどのような状況で同調行動をとりやすいのか調べることを目的とし、大学内や小学校の通学路で、サクラが何もない空に向けて携帯電話のカメラを向けるという方法で、その方向に視線を向けた(同調した)人の割合を算出したところ、サクラが5人いるときの子どもが最も同調の割合が高いという結果が得られた。

本実験から得られた結果を属性別にみて考察していく。まず発達段階別の割合を比較した図2から、子どものほうが同調の割合が高くなるという仮説とは違い、サクラの人数が3人に増えたところまでは、大人と子どもで同調行動に大きな差が出なかったことがわかる。だが、サクラが5人になると子どもの同調の割合が大きく増えていることがみて取れる。考えられる原因は、今回の実験で「子ども」という属性で実験対象としたのが集団下校中の小学生であり、そのことで同調が周りに広まりやすかったという点があげられる。大学生の場合は知人と一緒にではなく1人で道を歩いていた人が多く、そのような連鎖は起こらなかったのではないだろうか。また、小学生のような一点のみに意識を集中しやすい子どもにも、サクラの人数が5人という多人数になったことで、サクラの存在に気付かせることを容易にしたのではないかと考えられる。次に学力別の割合を

比較した図3から、学力の低い大学のほうが同調の割合が高くなるという仮説とは違い、全体的にみて両大学に大きな差はみられなかったことがわかる。ただ、サクラの人数が3人のとき、仮説とは逆に学力の高い大学のほうがやや同調の割合が高い。このことから、仮説の根拠として記した学力の高い人のほうが自分の意思を持った行動を選ぶ、ということはある程度周りをよくみて行動の判断をしているのではないかと考えられる。次に混雑度別の割合を比較した図4から、まわりに人が多い場合のほうが同調の割合が高くなるという仮説とは違い、全体的にみて閑散時のほうが、やや割合が高くなっていることがわかる。このような結果になった原因は、周りに人が多くいる場合より少ない場合のほうが周囲に視線を向けやすいからではないか、ということが考えられる。前述の、発達段階別の比較で小学生が集団でいた為に同調行動が多くみられたのではないかとこの考察は、周りが友人や知り合いだったために起こったと考えられ、他人の場合にはこの連鎖は起こりにくかったのではないだろうか。

#### 参考文献

- [1] 株式日記と経済展望  
<https://blog.goo.ne.jp/2005tora/e/9c96c80dceffef9293ca14079fd1e3ab> (最終アクセス日時 2019/2/9)
- [2] アロンソン, E. (岡隆 訳) 2014 ザ・ソーシャル・アニマル 人と世界を読み解く社会心理学への招待 サイエンス社